

客 論

地域支援コーディネーター 福永 栄子

今年も残すところ4日となった。いよいよ新しい年を迎える準備もたけなわ。美しく掃かれた庭。しめ縄を飾り、門松を立て、大掃除。九州各地の神社では、氏子まつりや神楽も一段落し、爾々



と、大祓い式や焼納祭、そして除夜祭などの用意が行われている。日本人にとって、正月を迎えることは大切な季節儀礼。身边を清め、心を引き締め感謝して迎える。奥九州を歩くと、昔ながらのお正月の儀礼、旧暦の正月「小正月」の暮らし風景が残っており、

驚くことが多い。正月、御幣を入る百万の神々にささげる。屋内には火の神様、屋外には水神様や荒神様など、生活の至る所に神々がいる暮らし。元旦、家主は家族の誰よりも早く起き、若水をくみに出掛ける。

昔から椎葉では新年初めて着物

暮らし文化を旅する

に袖を通すときに、呪文を唱えるという。「ねや起きて、胸の蓮華を押し合わせ、弥陀と薬師を結び込み参らする」寝屋から出るときなど、伝わる呪文は異なるという。農村の小正月の前日には、大地の霊を鎮めるためモグラウチを

行い、柳の枝には餅が飾られ(やなぎ餅)、1年の豊作が祈られる。それぞれ地域によって習慣もとき

たりも異なるから、大切である。門川町の庵川東・牧山地区では、小正月に飾る「やなぎもち作り体験」イベントをこの数年行っている。自分たちの暮らしに残っている昔ながらの農耕文化を残し、伝えていこうという試みである。この集落営農の取り組みの推進役でもあるミカン農家の園田雄三さん。「農村域のPRと消費者

との交流」と、語られる若い瞳は輝いている。毎年参加者も増え、消費者との交流で得るものも大きいと語られる。このように自らの生業に光を当て、農山漁村の暮らし文化を体感できるような交流の旅が今、注目されている。グリーン(ブルー)ツーリズムともいわれるが、自然環境を体感するプログラムなどと

総括して「エコツーリズム」と呼ばれる旅の形態である。

最近になってエコツーリズムという言葉をよく耳にするようになったが、エコツーリズム自体は決して新しい考え方ではない。私自身がこの言葉に接したのは、30年前、大学のゼミで観光学を専攻したとき、1980年代初め。当時、学んだのはカラパゴス諸島に

おける取り組みやオーストラリアのエコツアーについてであった。エコはエコロジー。ツーリズムとは観光。簡単にいえば、環境を考えた観光ということになる。環境は自然環境だけを指すのではなく、奥九州には、自然に対する畏敬と感謝の念を抱きながら暮らしてきた日本古来の生き方が現存しており、そのような伝統文化や郷土

のならわし、農耕儀礼などを含めた、自然歴史・文化など地域固有の資源を生かした観光を成立させること。また、観光によって地域固有の資源が損なわれないことがないよう、適切に保護をはかりながら、地域経済への波及効果をもたらす、地域振興に寄与することを目的とした観光の考え方である。

旅行者は、魅力的な地域資源とのふれあいを通して、地域に深くかかわり、地域の暮らしを応援する。また、新しいものの考え方、暮らしのあり方を知り、自分自身の生き方もまた変わっていくのである。新たな年の幕開け。新しい自分に出会う旅は、宮崎の農山漁村の生活を支えていけるだろうか。

ふくなが・えいこ 福岡県生まれ。上智大学外国語学部英語学科卒業。地域交流誌「みちくさ」編集長。県観光審議会委員。宮崎市。